

## (1) 作文教育研究会

会 長 濱松 美枝 (中村小学校)  
副会長 上田 浩稔 (中村南小学校)  
事務局 大西 由香 (東中筋小学校)

### 1. 研究主題

「書く意欲を高める指導」

### 2. 研究経過

月 日	活 動 内 容	場 所
5月 8日 (水)	組織総会 (役員決定、年間計画作成)	中村南小学校
8月23日 (水)	夏期研修会 講師による講話 講師：福田 千恵先生 演題：「作文の書かせ方」 実践交流	中央公民館
10月 2日 (水)	教科外教育研究大会 講師による講話 講師：田中 郁先生 演題：「書く意欲を高める指導」 実践交流	中村南小学校
1月20日 (月)	学習会 ・「四万十川の子」校正作業 ・学習「児童・生徒の作品をもとにした『詩』 の読み方、書かせ方の指導について」 ・本年度の活動の反省	中村南小学校

### 3. 今年度の取り組みより

#### 1 夏季研修会

(1) 講話 演題「作文の書かせ方」 福田千恵先生 (後川中)

- ①何のために書かせるの
- ②どのように書かせるか
- ③工夫として
- ④終わりに

#### (2) 質疑応答

- ・単元構想やノート指導が行き届いている。ワークシートを参考にしたい。掲示が生徒の意欲につながっている。視覚化が効果的。仕事量の多さに驚く。
- ・読解力への課題に対して、新聞記事の具体的な活用方法が参考になった。
- ・いつ書かせているか。  
→帯タイムを利用している。隙間時間や総合の時間にも書かせている。  
領域を超える。読むために書く、書くために読む。何サイクルも。「ここがよくなったね。もっといいものが書けそうだね。」と声をかけていく。
- ・書き方の枠の中で書かせていることにジレンマを感じている。本来は自由に書く、自己表現のための「書く」はずなのに、書き方が前提になり、情緒面が後回しになっている。書きたい気持ち、書いてよかった気持ちが大切にされなくてはならないのではないか。
- ・今は、先ず書かず。何が足りないかの自覚をさせて、ではどう書けばよいかの意識付けをし

た後、教科書のモデル文で書き方を学ぶ。そして対話、交流へ。前提となる書きたい気持ちの育みにくさがある。

- ・相手意識が大切。家の人へ書く。「したこと」を書く。ノートに書いて交流し、清書をする。
- ・書かすためには、材料がいる。材料を意識させる。計画的な種まきをする。材料集めをさせる（書きやすい材料を選んでくること）。メモを取る。書く時の見通しが持てる。

### (3) 実践発表

(中村小)「書くことの指導(1年1学期)」

- ・「見つけたよカード」の見方や言葉が豊かである。どう書かせたか。

→「見つけたよカード(生活科)」は、観察文。見たことをどう表現するか。理科、社会の見方、考え方である見る観点を教える。見方や言葉を引き出してから書く(「どう思った?」「何みたいやった?」)。生活の中で投げかける。意図的に見せる。交流させる(「隣に聞いて。」「どんなに書いたか見せてもろうて。)」気づき合ったり、本物に返ったり。

(東中筋小)「話し言葉をどう書き言葉につなげるか」

(中村中)「作文指導について」

- ・作文が書けない生徒への手立てとして、「書く」ために「読む」。教科書や資料の文章を読み、そこでの表現や工夫を参考にすることで文章を書きやすくする。「ここが好き。これはすごい。きれい。」など、動機づけを大切にする。

→社会、生活、行事とつながって、言語活動の構想が素晴らしい。

## 2 教科外研究大会

(1) 講話 演題「書く意欲を高める指導」 講師 田中 郁先生

生活綴方教育とは

自由にのびのびと。そこからの出発。

①「先生 もっと書きたい。」「書くのは 楽しいね。」・・・書くことの土台づくり・・・

②発達段階で大切にしたいこと

③作文教育の1年間

④終わりに

子どもたちは、日々様々な出来事に会い、物事に働きかけ、働きかけたりしながら感情や事柄を認識していく。書くことで、その認識を確かなものにしていく。それを、教師が受け止め、学級で読みあう中で、表現技術だけでなく、子どものたちの心にゆったりとやさしさを共有する力が育っていく。

(2) 質疑応答、実践交流から

- ・日記に赤ペンをいれる時間がない。

→・回数を減らして、無理のないようにする。プリントに書かせる。金曜日に提出させる。

・月曜日に持って返させ、金曜日までに書きたいことを書く取り組みをしている。

- ・日記を書かせられない。

→・国語の振り返りや、自主学習に書かれた日記に赤ペンを入れる。

できるだけその子に寄り添える赤ペンを入れる。

- ・中学生の作品が少ない。書く時間がない。

→・自分の考えをしっかり持てる子に育てたい。書くことで、自己教育力を伸ばす。整理することで、すっきりする。

- ・文化祭、身近な美術の先生という関心から入っていくことができた。始めは2行しかかけていない生徒も、付箋で交流しながら内容を充実させていった。(中村中)

→・情報の高い作品だからこそ、具体的に、自分の言葉で書けている作品を評価してやりたい。

- ・書く単元がない。

- ・言葉の生まれてくる過程を大切にする。(ネタさがし。取材メモ。図書室で調べる等)
  - ・情報に流されて、実感が伴わなかったりする。
  - ・「伝記」なら、「僕を変えた出会い」自分に戻せるように。自分の財産になるものを置いてあげるように。
  - ・「感想文」なら、その子の生活が見えるもの。
- ・内容はいいのに、書き方がよくない。どこまで直していいものか。
  - ・できるだけ子どもの書いたものを大事にする。「あなたが1番書きたいことは」「そこを訴えられるようにするには、何を入れたらいい」「どんな書き方をすればいい」こうすれば伝わるという技法を知らせる(短い文章。呼びかけなど)。自分の経験を書いているものを選ぶ。その中で「1番伝えたかったことは」を聞くだけでもいいのではないか。
  - ・中村小の児童作品から、のびのびと書けているかどうか、絵を見たらわかる。比喩が楽しい。
  - ・「心が動く」をどう教えたらいいか。
    - 心はいろいろある。エンケラプン。心のチャンネル。うれしいことだけでなく、悲しいことも。
  - ・荒れたクラス。素直に聞かない子どもの状況を耳にするが、本来子どもは、素直に聞くものではないか。
    - この子を何とかしたい。その子の背景を耕していくことからしていく。その子を核にしてやると変わっていく。中心にしたい子どもを学級通信に1番に乗せる。長い目で見ていくことも大切。子どものかわいらしさを伝えていく。

### 3 学習会・校正作業 (学習会より)

- ・素直にのびのびと表現された昨品が多かった。
- ・題材も、前に向かっていく力であったり、優しさやあたたかい関りであったりと、作者にとっても読んでいてもうれしくなる作品が多かった。
- ・反面、概念的、散文的な作品も見られ、感動を切り取る指導が必要である。
- ・高学年になると、行事を通しての頑張りや成長を題材にした作品が多くなる。
- ・中学生は、将来の夢につながる作品もあり、題材の広がりを感じられる。応募数が少なかったことが残念であった。中学生になると表現しなくなる課題がある。
- ・まずは、書きたい気持ちが大事にされなくてはならないが、表記の間違いが多かった(特にひらがなの長音。( )の使用)。今年は、1行の長い作品が多く、表現方法である詩のリズムに馴染ませたい。

## 4、今年度の成果と課題

(成果)

- ・中学校の実践を学ぶことで、小学校からの系統や、つけたい力のゴールイメージを持つことができたことはよかった。
- ・実践に基づいた説得力のある話から、改めて「作文教育の大切さ」と、これから生かしていきたい具体的な指導方法を学ぶことができた。低学年の指導から、中学年、高学年、中学校へとつなげる指導の系統が学べたこともよかった。
- ・実践交流を通して、指導方法や課題、改善策等について学び合えたことはよかった。
- ・学年を超えた作品を読み合うことができ、表現させることへの刺激につながった。

(課題)

- ・「四万十の子」に応募する学校が限られている。参加校や応募数を増やしたい。そして、子どもの活躍の場である機会を活用してもらいたい。
- ・本会の活動を紹介し合って、「書くこと」の指導について学習したいという仲間を増やしていきたい。